

箱崎 53

—箱崎遺跡第71次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1343集

2018

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI
箱 崎 53

—箱崎遺跡第71次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1343集



遺跡略号 HKZ-71

調査番号 1415

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査地点を含む箱崎遺跡が中世の国際貿易都市として知られる博多と並んで発展した状況が徐々に明らかになってきました。今回、その中心を占める筥崎宮と関連が深い梵鐘の鋳造遺構が発見されたことは特に重要です。筥崎宮の創建当時の状況や実態が知られていない神宮寺を考えていく上で貴重な資料を提示することになりました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成26年度に共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎1丁目2584番1、2584番5地内で実施した箱崎遺跡第71次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業および国庫補助事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は藤野雅基、荒牧が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、平川敬治、荒牧、淨書は樋口久美子、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡　例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、土壙をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。
4. 報文中の輸入陶磁器の説明には『大宰府条坊跡X V』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、土器の説明には山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性 [10] 九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997、瓦の説明には『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000の編年・分類を用いた。

調査基本情報一覧

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	71次	調査略号	HKZ-71
調査番号	1415	分布地図福番号	034	遺跡番号	2639
申請地面積	452m ²	調査対象面積	200m ²	調査面積	160m ²
調査期間	平成26（2014）年6月19日～平成26年8月8日		事前審査番号	25-2-981	
調査地	福岡市東区箱崎1丁目2584-1の一部、2584-5の一部				

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市東区箱崎1丁目2584-1の一部、2584-5の一部における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年12月6日付で受理した。これを受けた文化財部埋蔵文化財審査課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから確認調査を同年12月16日に実施した。確認調査では現地表面下75cm以下に遺構面が確認されたことから遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成26年6月9日付で株式会社TYMユーポレーションを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。続いてこの契約に従い発掘調査を同年6月19日から8月8日まで実施し、平成28年度、29年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

平成26年度の発掘調査、および28年度、29年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

(平成26年度 発掘調査)

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄 同課調査第2係長 榎本義嗣

【庶務】 埋蔵文化財審査課 管理係長 内山広司 管理係 川村啓子

【事前審査】 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 佐藤一郎 主任文化財主事 池田祐司 文化財主事 板倉有大

【調査担当】 埋蔵文化財調査課 主任文化財主事 荒牧宏行

(平成28年度、29年度 整理・報告)

【整理・報告総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄 同課調査第2係長 加藤隆也(28年度)、大塚紀宜(29年度)

【庶務】 埋蔵文化財課管理係長 大塚紀宜(28年度) 管理係 入江よう子(28年度)
文化財保護課管理調整係 松尾智仁(29年度)

【事前審査】 埋蔵文化財課 事前審査係長 佐藤一郎(28年度) 本田浩二郎(29年度) 主任文化財主事 池田祐司 文化財主事 清金良太

【整理・報告担当】 埋蔵文化財課 主任文化財主事 荒牧宏行

3. 調査の方法と経過

調査は廃土置き場を確保しながら掘り進めるため、調査区を南北に分割し、さらに南半分を東西に分け、全体として3分割で行った。順序は北半部からはじめ、南東部、南西部と続けた。調査区内は現代の攪乱が著しく、広い範囲で地山の砂丘面まで大きく抉られていた。調査の中心となった梵鐘鑄造土壙SK42は北半部で一部かかり、南東部の調査で全体を検出した。

II 位置と環境

1. 地形

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘上に立地する。周辺には同じく、砂丘上に博多遺跡群、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡等が立地し、浜堤列が形成されていたことを示す。

箱崎遺跡の範囲は南北1050m、東西550mに及ぶ。西側には中世の海岸線近くとみられる元寇防堀が筥崎宮の本殿から西側に460m離れ、東側は宇美川で画され、さらにラグーンが広がる。

砂丘の頂部は筥崎宮周辺にみられ、砂丘列の尾根が現在の大学通りに沿って延びる。

2. 既往の調査成果から

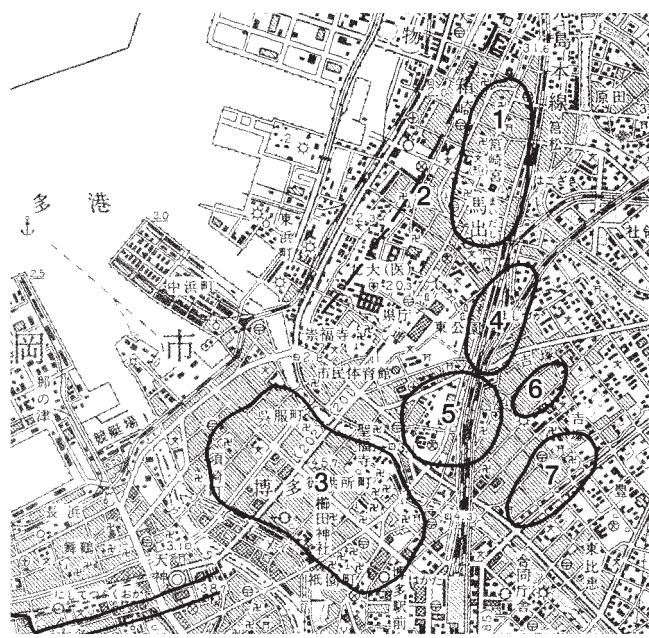
遺跡の時期としては弥生早期の夜臼期に遡る可能性があるが、遺構は知られていない。古墳後期以降には蛸壺等の漁具の出土をみる。遺構、遺物が増加するのは筥崎宮が創建された10世紀以降である。箱崎宮の北側に10世紀代とみられる遺物を散見するが、遺構の構成等は把握できていない。10～11世紀代の瓦当を含む瓦片は筥崎宮を中心に北東部や南側で出土している。大宰府出土と同じ型式の瓦当片は大宰府との結びつきを示している。今後、遺構が少ないと考えられる筥崎宮や神宮寺の範囲を視野におき考察していくことが大きな課題である。

11世紀後半以降は、博多同様に遺構、遺物等が急激に増加し、活発な貿易が行われ始めたことを示す。輸入陶磁器等は14世紀初頭頃までの時期を多くみる。また、12世紀代の中国系の瓦当も上記の大宰府系の瓦当と同じく筥崎宮の北東部や南側から出土している。

15世紀以降は筥崎宮周辺においては、この中世包含層の上面で検出される。浅く遺構、遺物が検出され、上部が後世に削平され整地されていることを示す。既往の一部の調査では中世包含層を除去したことから特に15世紀以降を失っている。遺構の層位や井戸の配置等から15世紀前後に土地の改変が行われた可能性がある。

3. 文献から

ここでは調査の中心となった梵鐘鋳造遺構に関する10～11世紀代の筥崎宮を主に記すことにする。箱崎遺跡の発展の契機となった筥崎宮は「筥崎宮縁起」によれば延長元年（923）に穂波郡大分宮から遷座したという。また、承平七年（937）の大宰府牒によれば筥崎宮に併置されていたとみられる筥崎神宮寺に多宝塔を造立するよう申達しているのでこの時期までには筥崎宮と神宮寺は創建されていたことが知られる。筥崎宮に遷座した理由としては新羅入寇の危機感と大宰府官人の日中貿易への私的な関心によるところが大きいといわれる。大陸に対して最先端に位置した博多湾沿岸に鴻臚館、博多、香椎宮とならび防衛と貿易の拠点を配置させるというものである。創建理由の後者については、筥崎宮大宮司が大宰府官の秦氏といわれ大宰府と筥崎宮が密接に結びついていたことが関連している。『今昔物語集』26-16、『宇治拾遺物語』180ではその大宰府官人の秦貞重が私的に宋人の貿易商人と取引し、中央の権勢に贈り物を行う姿が如実に描かれている。



1. 箱崎遺跡 2. 元寇防堀 3. 博多遺跡群 4. 吉塚本町遺跡
5. 堅粕遺跡 6. 吉塚祝町遺跡 7. 吉塚遺跡

Fig. 1 箱崎遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)

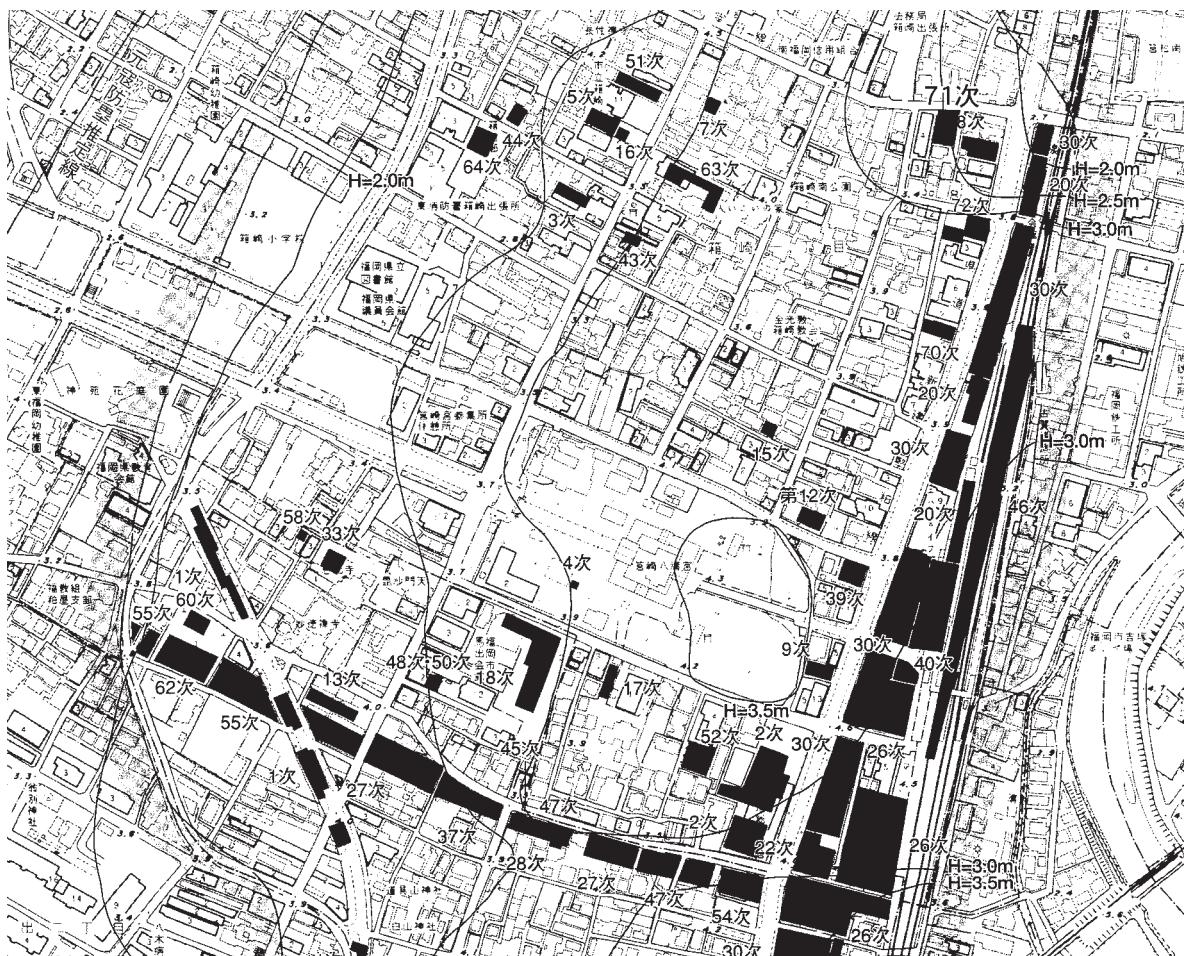


Fig. 2 箱崎遺跡調査地点図 (1/5,000)

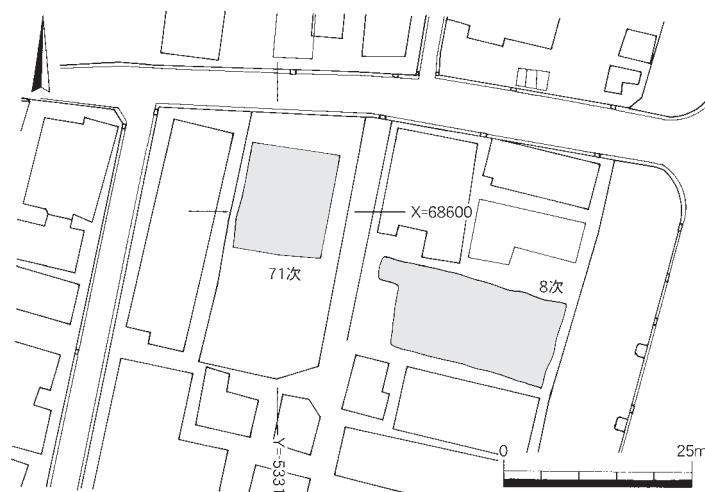


Fig. 3 箱崎遺跡第71次調査範囲図 (1/1,000)

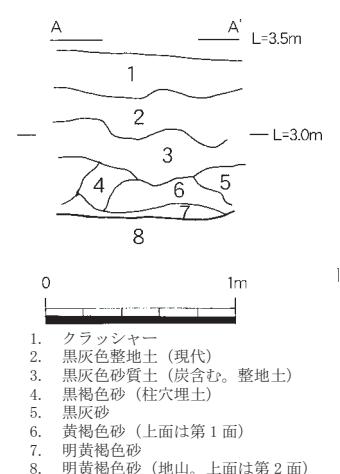


Fig. 4 基本十層図 (1/40)

III 調査の記録

1. 調査の概要

現代の攪乱が著しく、遺構は部分的に残る。遺構面は地山の砂丘面とその上部10cm位の暗褐色砂の2面で行った。遺物から10~13世紀、15世紀から近世にかけての時期がみられる。10世紀代に遡る可能性がある梵鐘鋳造土壙SK42は宮崎宮創建に関連すると考えられる。

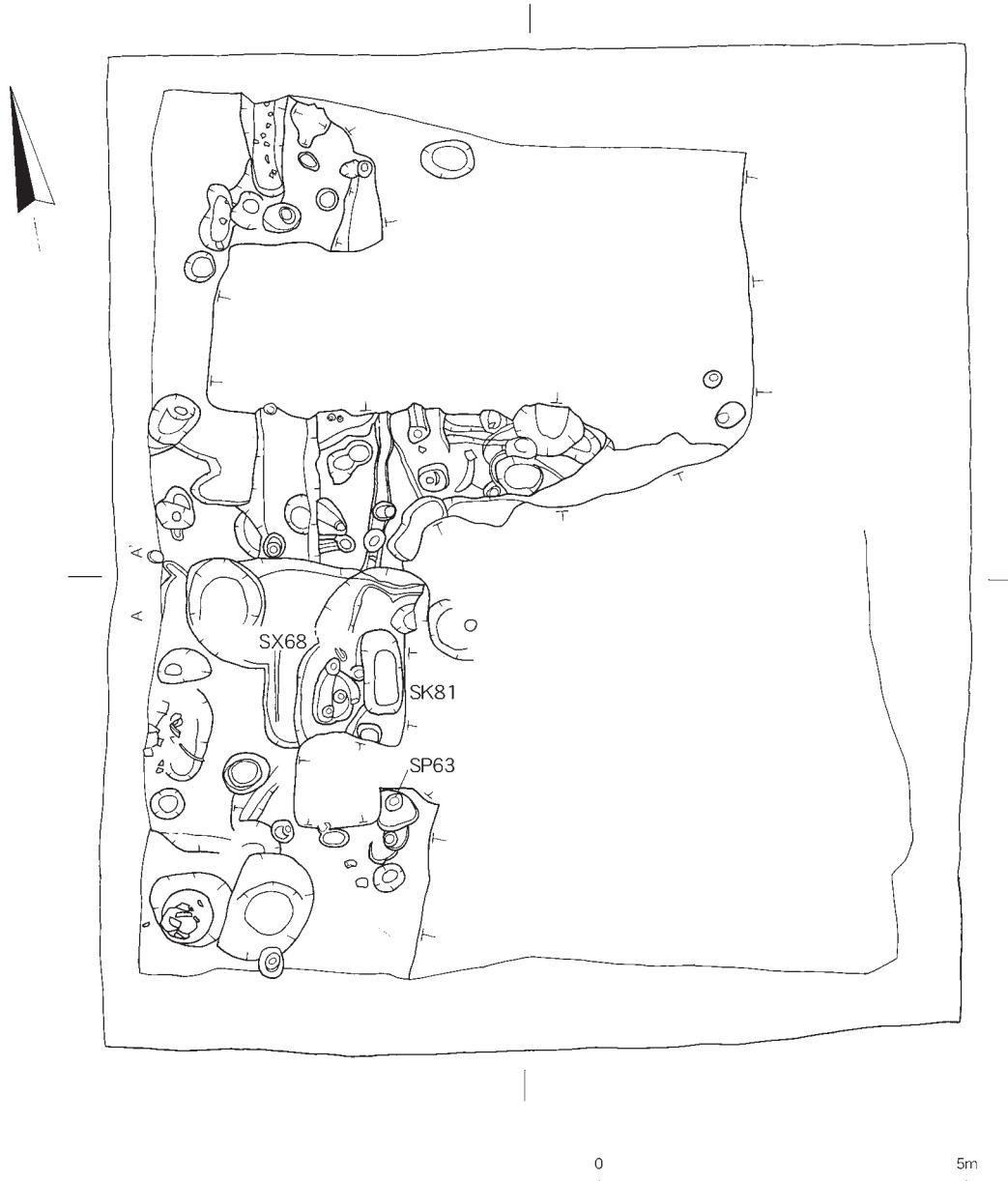


Fig. 5 第1面遺構配置図 (1/100)

2. 基本層序 (Fig. 4)

現代整地土下に中世の包含層（3層）がわずかに残るが、攪乱の除去のため地山の明黄褐色砂の上部約10cmに堆積した漸移層の褐色砂上面を第1面とした。第2面の地山の明黄褐色砂は標高2.7mを測り、調査地内ではほぼ平坦である。

3. 遺構と遺物

SK42 (梵鐘鑄造土壙 Fig. 7)

調査区の中央部で検出された。調査区を反転して調査を行った為に誤って先に北側の一部を下底ま

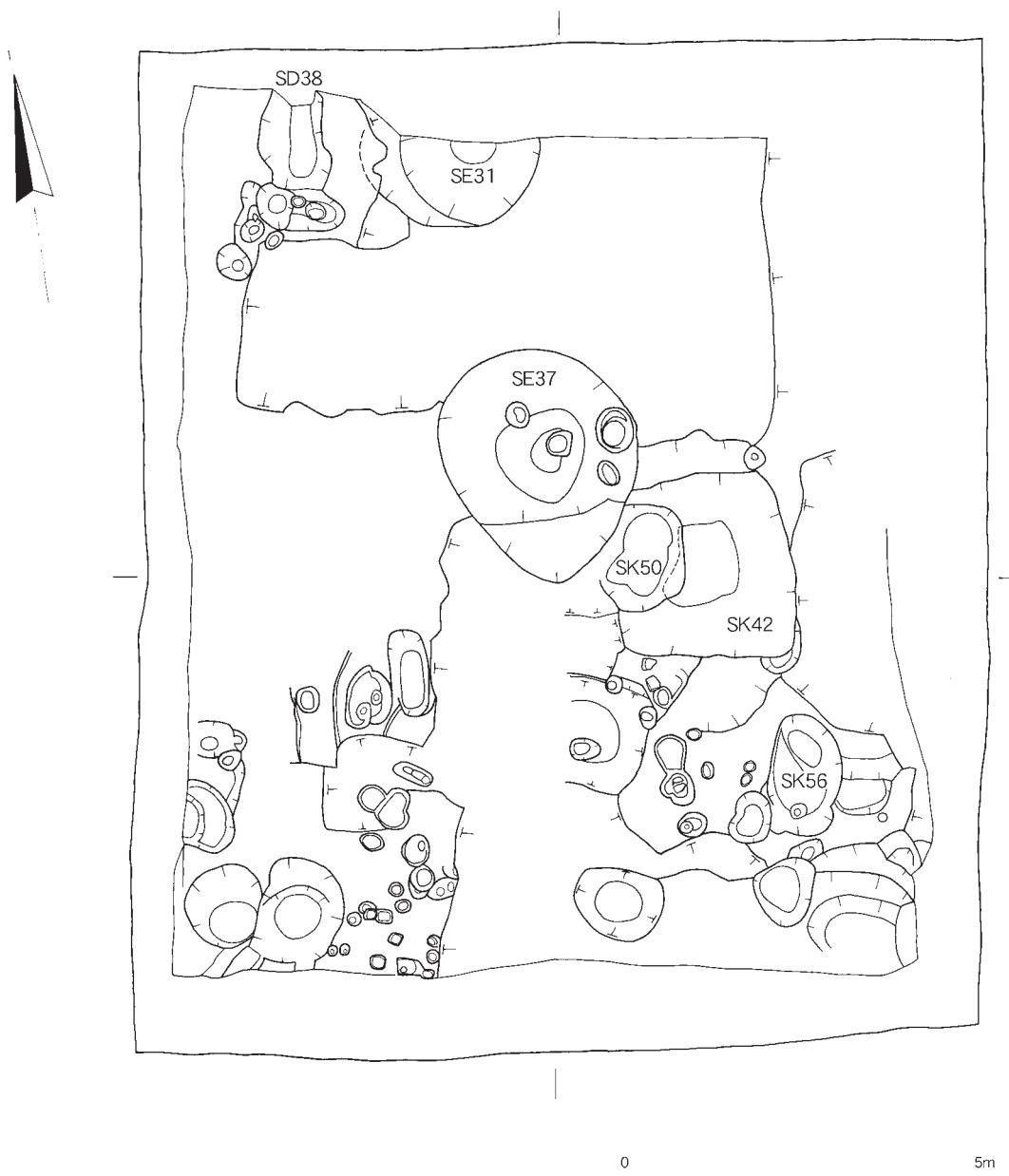


Fig. 6 第2面遺構配置図 (1/100)

で掘り抜いてしまった。後に全体を検出した際に灰白色粘土、焼土塊、炭、灰、鋳型等を多量に含む黄褐色ないし、淡い灰褐色砂土からなる略方形プランの土壙が検出された。(Ph. 1) 西側はSK50、SE37で切られていたが、復元できる方形プランの規模は主軸長でみると南北、東西ほぼ変わらない2.5mを測り、正方形に近い。

SK50と切りあつた部分や北側の断面から中層 (Fig. 7 2層) に焼土を多く含み赤褐色を呈した層が堆積していることが判り、その上面まで掘り下げた。(Ph. 2、3) 層厚は10cm程度で南側に偏ってレンズ状に堆積していた。(Ph. 4) この焼土層を除去すると崩れて塊状となつた黄灰色、灰白色粘土塊を主とし鋳型を多く含む層がレンズ状に堆積していた(3層)。ジョウ(底型)の上部が崩壊したものを含むとみられる。

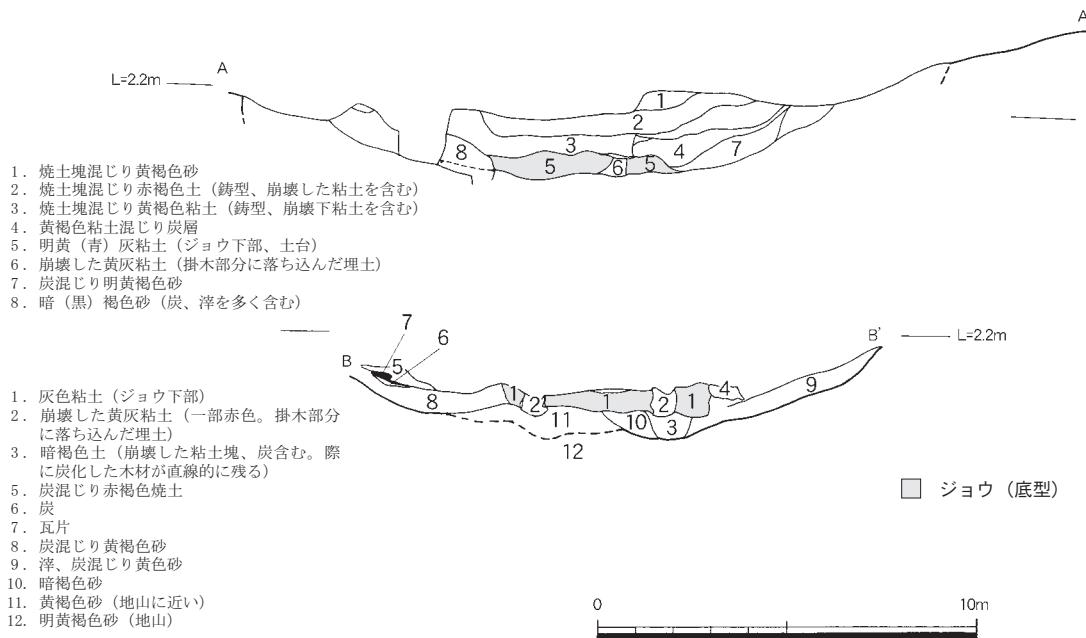
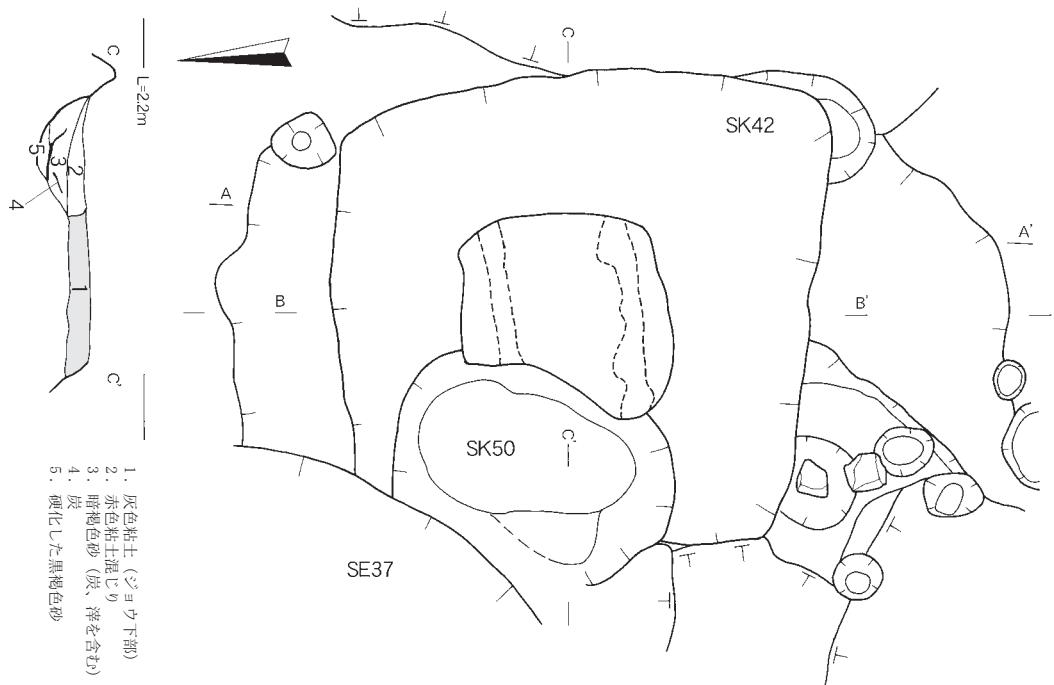


Fig. 7 SK42実測図 (1/40)

最下層はジョウ (底型) の灰白色粘土 (5層) とその外周に堆積した炭を多く含む層 (4、6層) からなる。(Ph. 5、6) 検出されたジョウの平面は主軸長110cmを測る隅丸の正方形に近い。厚さ12~15cm程度が遺存し、上部は淡黄灰~淡赤褐色を帶びた灰色を呈す。(Ph. 7) 部分的に強い火熱を受け

暗赤褐色に変色し、中央部の径10cmの範囲と東寄りに径6cmの略円形の範囲で特に強い火熱を受けた部分が検出された。

この検出したジョウ（底型）の上面や周縁からは鋳型やその痕跡を見出すことはできなかった。従って、検出されたジョウはその下部とみられ、鋳型面は崩壊していたと考えられる。また、出土遺物中にも口縁部が回るような鋳型片は含まれていない。ジョウの下面には部分的に炭が検出されたが、面的に広がらず、定盤の痕跡は検出されなかつた。

ジョウには平行する2本の掛木の痕跡が検出された。ジョウ内部

では掛木腐敗後、そこに空隙ができ、直上の粘土が崩落していた。崩落によって、ジョウ周縁の粘土が引きずり込まれ傾斜している。このジョウの下で明確に検出できた掛木の痕跡は外縁に薄く木片が残り、内部は崩落した粘土で充填されていた。(Ph. 8) その径は20cm、掛木の間は芯心で70cmを測る。丸木、角材などの形状は不明である。掛木を設置する際には幅広く地山の砂丘砂を掘りこんでいる。ジョウの周囲には炭を多く含む層が堆積し、東側はジョウの底面より深く掘り下げられて、焼土、炭層が堆積する。(Ph. 10) この範囲からは掛木の延長を検出することはできなかつた。ジョウに近接して炭とともに比較的大きな瓦片が出土した。ガス抜き等に使用された可能性もある。土壙内からは小割にされた瓦片が151個体出土した。

前記のようにジョウの周囲には炭が多いが、敷き詰めた状況ではないことから土壙内を焼いた可能性も考えられる。また、鋳造の際、固定するため土壙内を充填したことを示す明確な堆積はみられなかつたが、方形土壙の北辺に平行して幅50cm広がった範囲で焼土層の上部に炭を含む汚れた明黄褐色砂が堆積していた。(Ph. 9) また、南辺側では鋳造土壙の上端から1m以上に及んで不整形な拡がりが確認された。埋土は炭を含み汚れた地山の明黄褐色砂からなり、梵鐘を取り出す際に鋳造土壙を広げた跡の可能性がある。

鋳型

1. 龍頭

1は対になる鋳型との接合面と下面の笠形との接合面が残る。外面は隅丸方形の柱状をなし、上部にかけて窄まっていく。下面の接合面は平坦をなす。鋳型外面は粗いナデの後、0.5~1cmの厚みで粘土を上方にかけて厚く被せ、柱状に仕上げている。被せた粘土も内面同様に緻密である。

龍頭の形状は口、牙、歯、鼻が遺存している。上顎が大きくうねりながら横へ伸びている。上顎から斜め上に突き出た牙が造形されている。牙は接合面まで延びていることから、左右の牙の先端が中心部で接する形となる。牙の後方には上顎に平行した歯が並ぶ。歯の上には鼻下の鬚が細線で表現され、鬚の上には鼻腔を大きく膨らました鼻が球状に表されている。

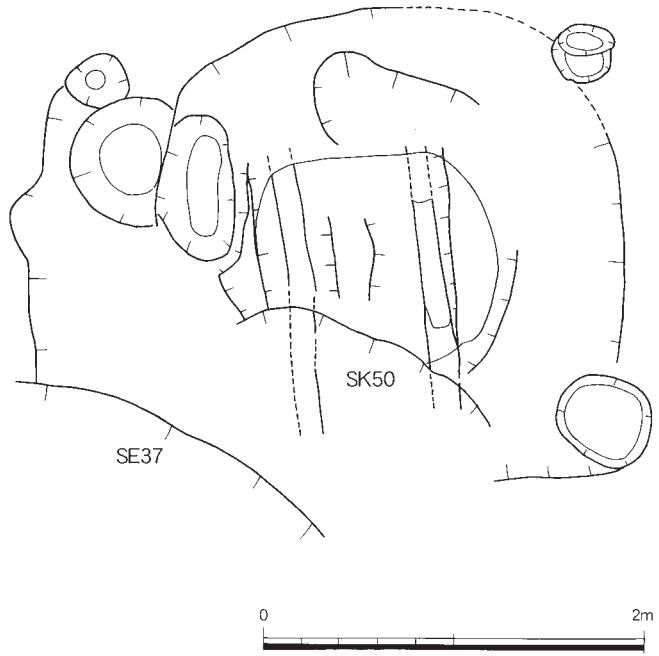


Fig. 8 SK42下面実測図 (1/40)

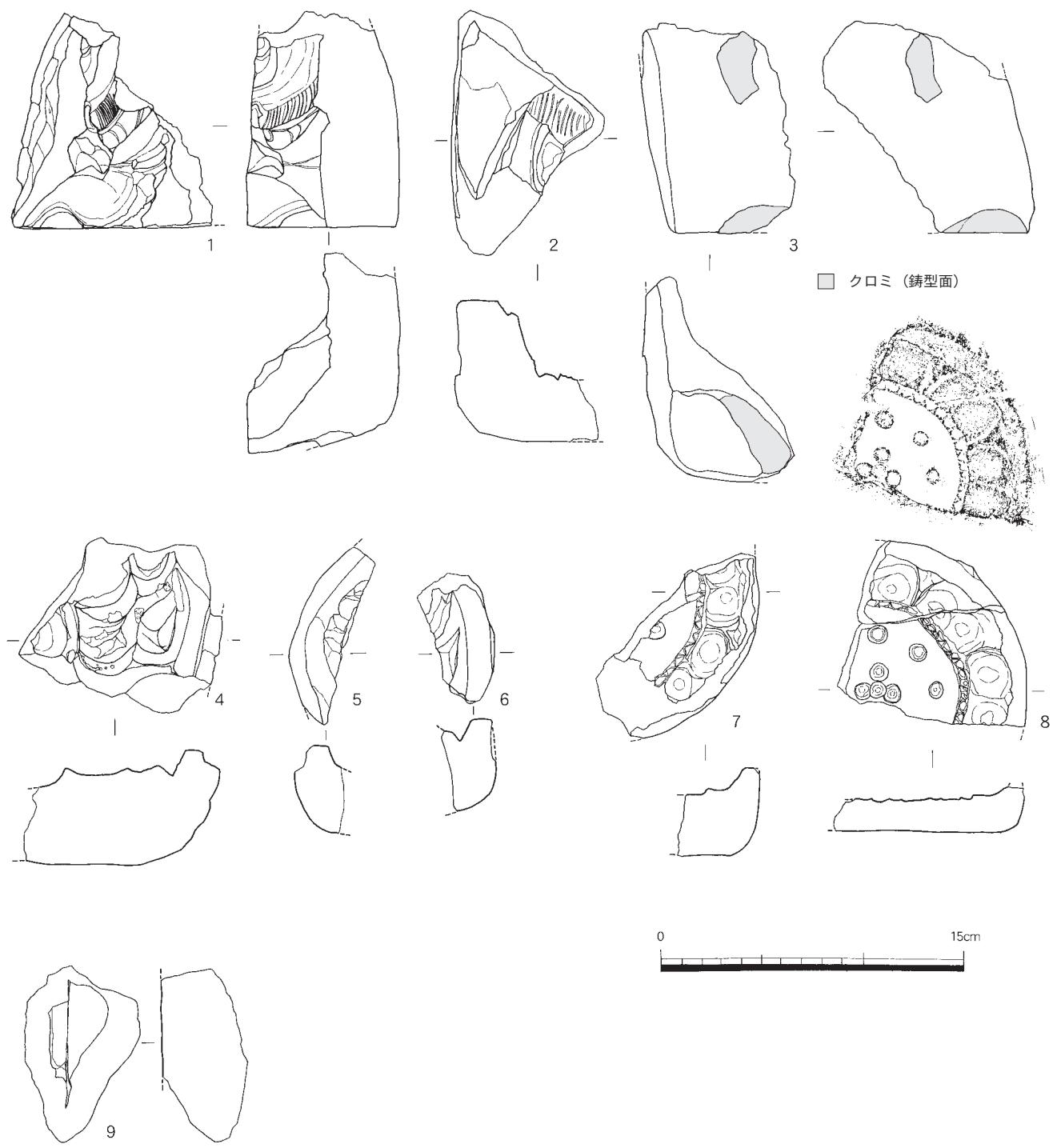


Fig. 9 SK42出土鋳型実測図1 (1/3)

内面は口の内部が灰色、他は赤褐色を呈し、部分的にクロミが残る。外面は灰色を呈し、ひび割れて劣化している。

2は耳とその周辺の後頭部である。遺存する頭頂部は湾曲した輪郭を突出した線で鋳出す単純な形状である。耳の後方に細線による鬚を表している。耳の尖った先端から頭部にかけて、直線的な浅い線が入り、鬚の区画となっている。



Fig. 10 SK42出土鉄型実測図 2 (1/3)

対の鉄型との接合面は平坦である。内面は赤褐色から灰黒色を呈し、耳周辺にクロミが残る。外面は灰白色から淡赤褐色を呈し、外側に厚さ5mm程度の粘土を被せた剥離面がみられる。

3も隅丸の方柱状の外形から龍頭の鉄型と考えられる。図上、下面にした平坦面が接合面となっている。この接合面にかけて一部クロミが付いた鉄型面が残り、開いた形状がみられるが、1と対になる部分がない。従って、鉄型面が残る接合面は上面の可能性がある。外面は2と近似した灰白色から淡赤褐色を呈す。

4は龍頭上部に位置する火焰宝珠である。鉄型の外縁には幅9mmの平坦な接合面を作り出す。外面の接合面付近は被覆した粘土が剥離している。

鉄上がりの外縁の最大幅は14.2～15.0cm、宝珠径は3.4cmである。宝珠から外縁まで大小2つの円弧を絡み合わせて、火焰が昇り上がる形状を表す。クロミが残り、緑錆が付く。内面は赤褐色、外面は2～3の龍頭鉄型同様に灰白色から淡赤褐色を呈す。

5、6は火焰の先端部鉄型である。5の鉄型外面は灰色から黒灰色を呈し、劣化が著しく、緑錆が付く。

撞座

7、8は活け込み式の撞座の鉄型である。7、8は厚みが異なり、別個体である。

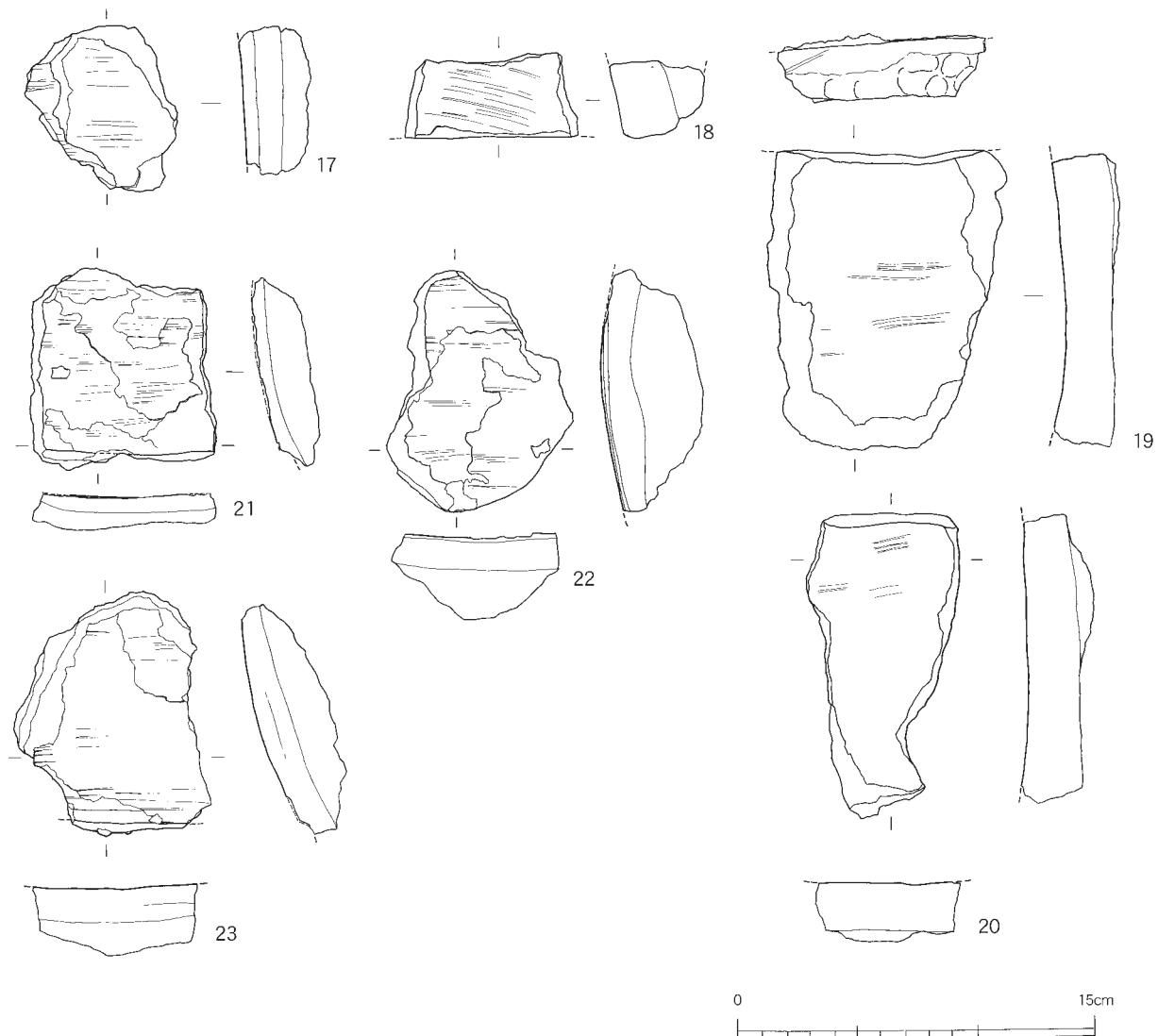


Fig. 11 SK42出土鋳型実測図3 (1/3)

7の周縁は台形状である。文様面はクロミがわずかに残るが、灰色を呈し、劣化している。厚さは3.0cmを測り、8に比べて厚い。

8の周縁は径14.4cmを測る。中房には1+4+8の珠文が配されている。珠文は径9mmを測り、輪郭は凸線で縁取る。その外側には細い凸線で幅5mmに区画された中に小さな鋸歯文が施されている。この内区径は8.6cmを測る。さらに外側に複弁8葉文が配されている。弁先は丸く、間弁を有す。周縁は幅7mmの凹線で鋳上がる。文様面全体にはクロミが残る。外面にはヘラや棒状の工具で調整した痕やスサの痕が残る。淡赤褐色を呈し、厚みは1.4cmを測る。

9は接合した状態の鋳型である。胎土は赤色粒を含み緻密である。胎土や厚みから龍頭の鋳型である可能性が高い。

笠形

10、11は笠形の外型と考えられるが、逆位で図示している。9は誤差が大きいが、図上、上端の段(横帶)内側で43cmを測る。この段は高さ5mm、外側に5mm張り出す。内面は挽型の痕を残し、天井は中央へわずかに高くなる。図の上面の接合面は平滑に仕上げ、そこから内面にかけて赤褐色から灰色を呈す。炭が付着し、灰色部分は特に強い火熱で劣化している。

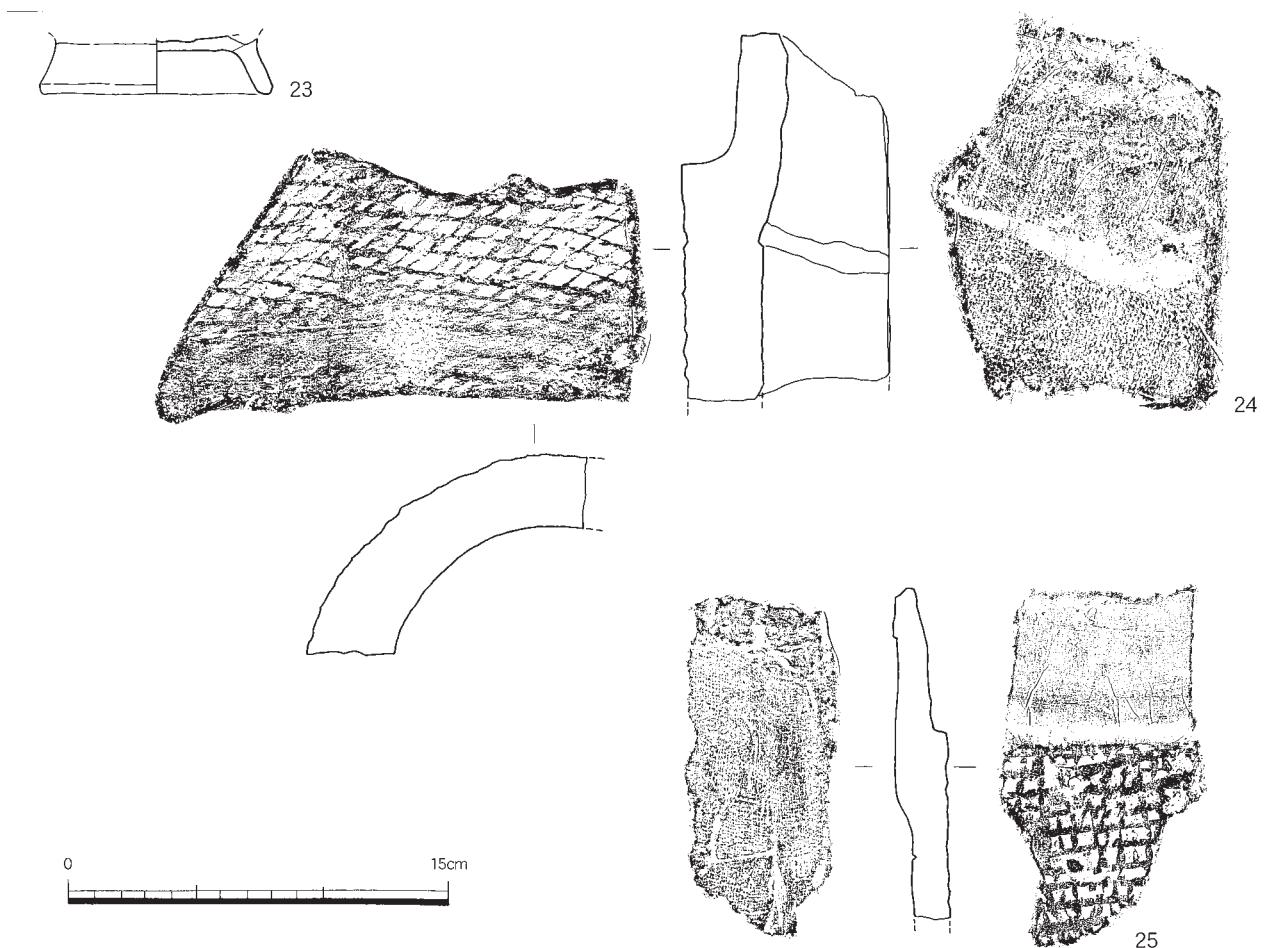


Fig. 12 SK42出土土器・瓦実測図 (1/3)

側面に、笠形の円弧に対し垂線で分割した接合面が残る。この接合面の上部（図の下面側）は天井（図の下面）のスサ入り粘土が入り込み、鋳型面側は指痕やヘラ状工具の成形痕がそのまま残り、滑らかな面となっている。

外面の周縁は指頭痕が深く残る粗いナデにより成形している。天井部（図の下面）は平坦な水平面となり、剥落したとみられるスサ入り粘土が薄く付着している。遺存している鋳型の粘土は粒子が細かい真土からなり、粘土の重なりを見出すことが難しい。この天井部は灰白色を呈すが、周縁は接合面（図の上面）と同じく淡い赤褐色を呈す。11は10と同じ部位の破片である。

横帶

12は傾きから上帶と思われる。遺存する帯の部分は灰色、他は灰白色を呈し、厚み7mmの真土と褐色を呈した脆く粗い粘土からなる。

13は2条の横帶部分である。帯幅1.8cmを測る。鋳型面に厚さ1mm弱の灰白色を呈した上真土が塗られている。表面にはクロミは残っていないが、暗灰色を呈す。その外側に砂粒を少し含み、やや粗い粘土、さらに、外側に褐色を呈し、脆いスサ入りの粗型の3層構造となっている。

14の遺存する横帶の凹面は幅1.3cmを測り、灰色から灰黒色を呈す。鋳型面側に白色砂粒を少し含む緻密な真土が厚さ6mm塗られ、淡黄灰白色を呈している。その外側は脆く、2~3mmの大きな

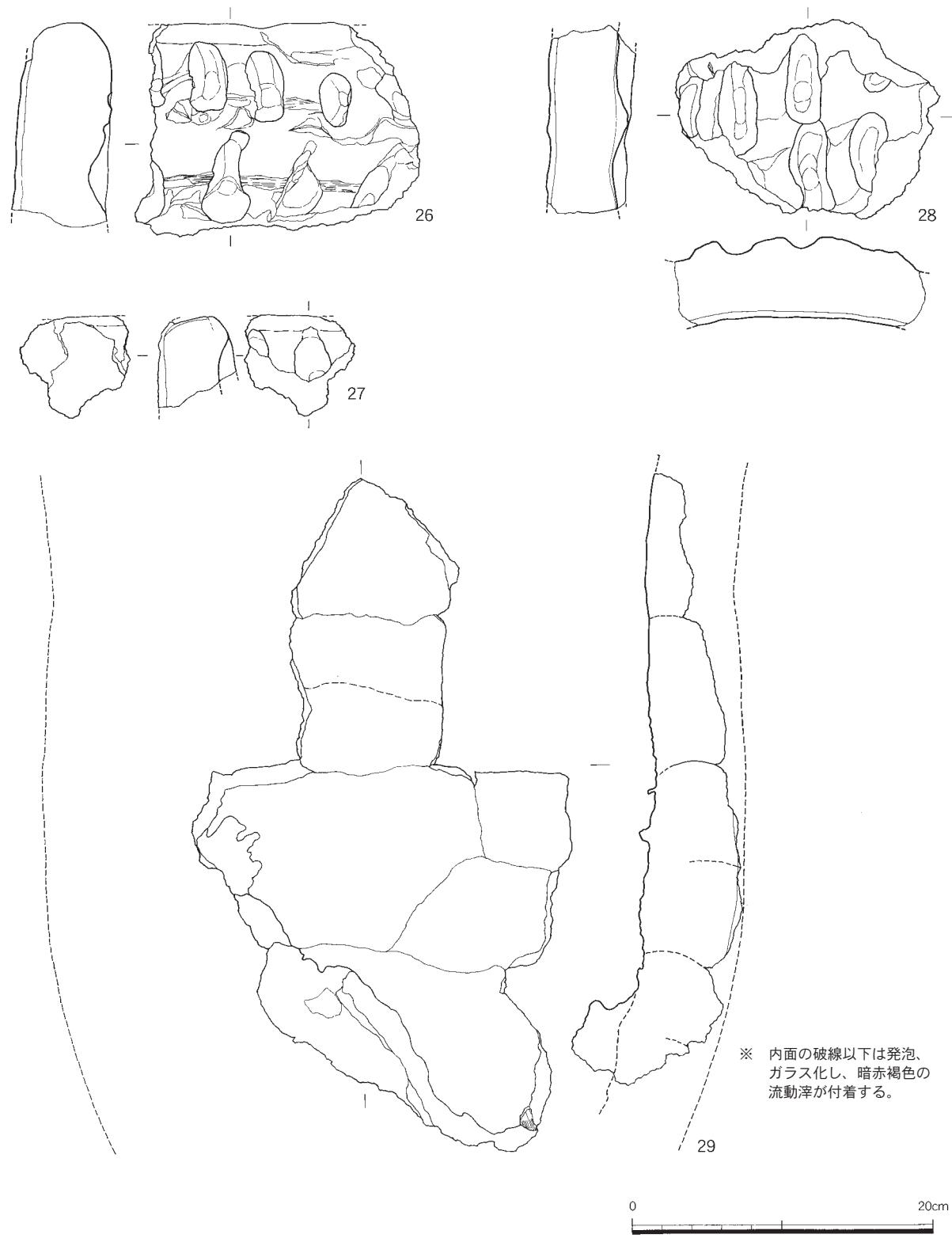


Fig. 13 SK42出土溶解炉実測図1 (1/4)

砂粒を多く含む粗い粘土となり、赤褐色を呈している。上面が平坦となって破碎していることから、粘土を積み重ねた接合面とみられる。

15は14に近い部位とみられる。遺存する厚さは6.5cmを測る。

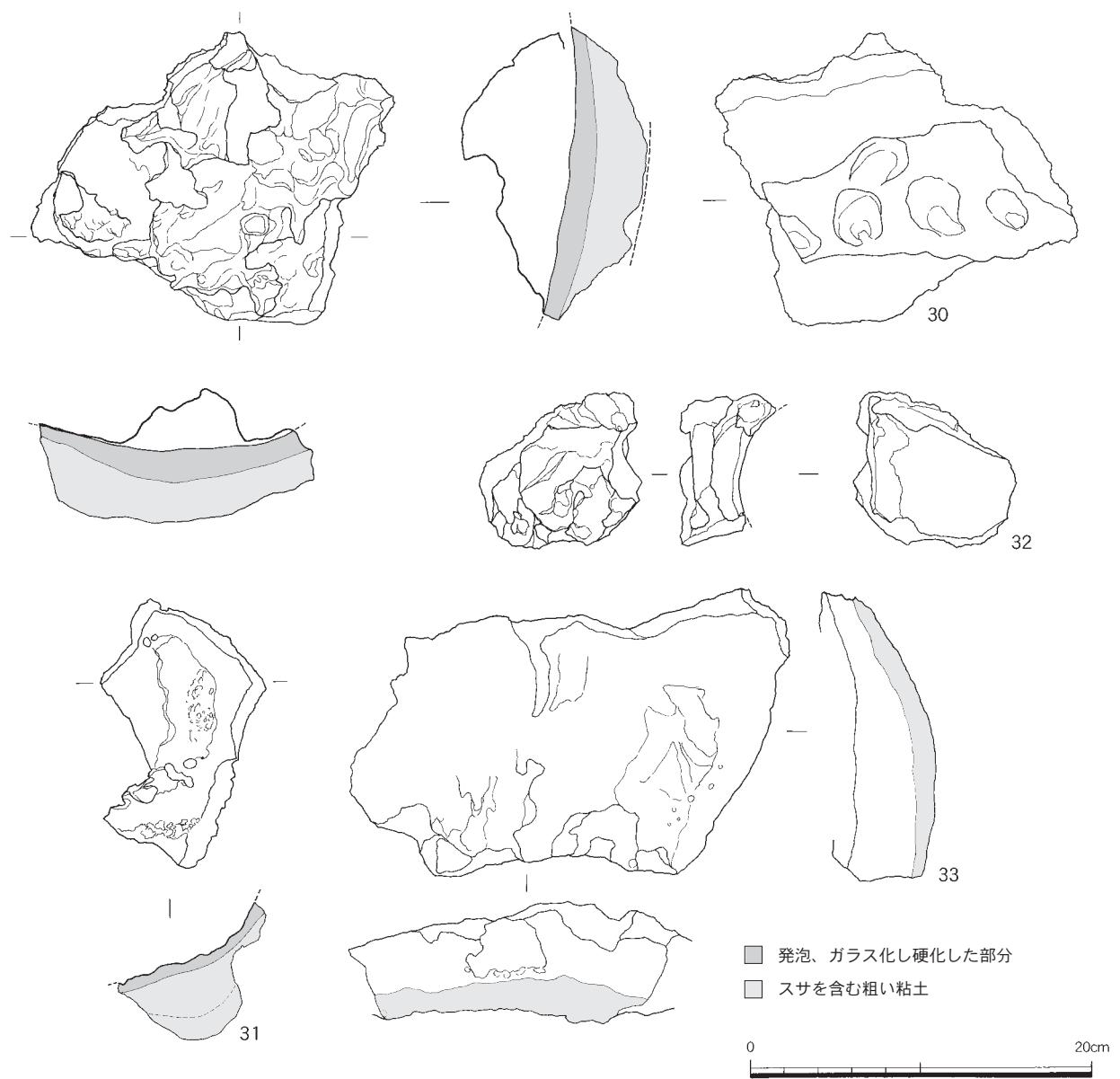


Fig. 14 SK42出土溶解炉実測図 2 (1/4)

16は13と同じく、重層構造が明瞭である。遺存する外側の粘土は淡赤褐色を呈し、粗い。

その他外型

17は3層構造が明瞭である。クロミを塗った表面は剥落しているが、挽き型の痕跡を残す、緻密な真土、その外側に同様に挽き型の痕がみられるが、少し砂粒を含み粗くなった粘土、更に外側が粗土となる。

18～20は2層構造となり、厚く緻密な真土とその外側の褐色を呈し脆いスサ入りの粗型からなる。18は厚さ2.4cmの真土の鋳型面にクロミが残る。外側に開いた下端に平坦面が残る。接合面の可能性があるが、外側のスサ入り粘土が平坦面にわずかに被り、そこから粗型の外表となっている。

19の鋳型面は内湾し、上端に接合面が残る。厚さ2.1～2.4cmの緻密な真土の外側に薄くスサ入り粘土が付着している。接合面には指頭による成形痕が残り、外側付近にはスサ入り粘土が被っている。真土は不明瞭であるが、2～3層に分離できる部分がある。鋳型面は黒灰色を呈し、小さな緑錆が付

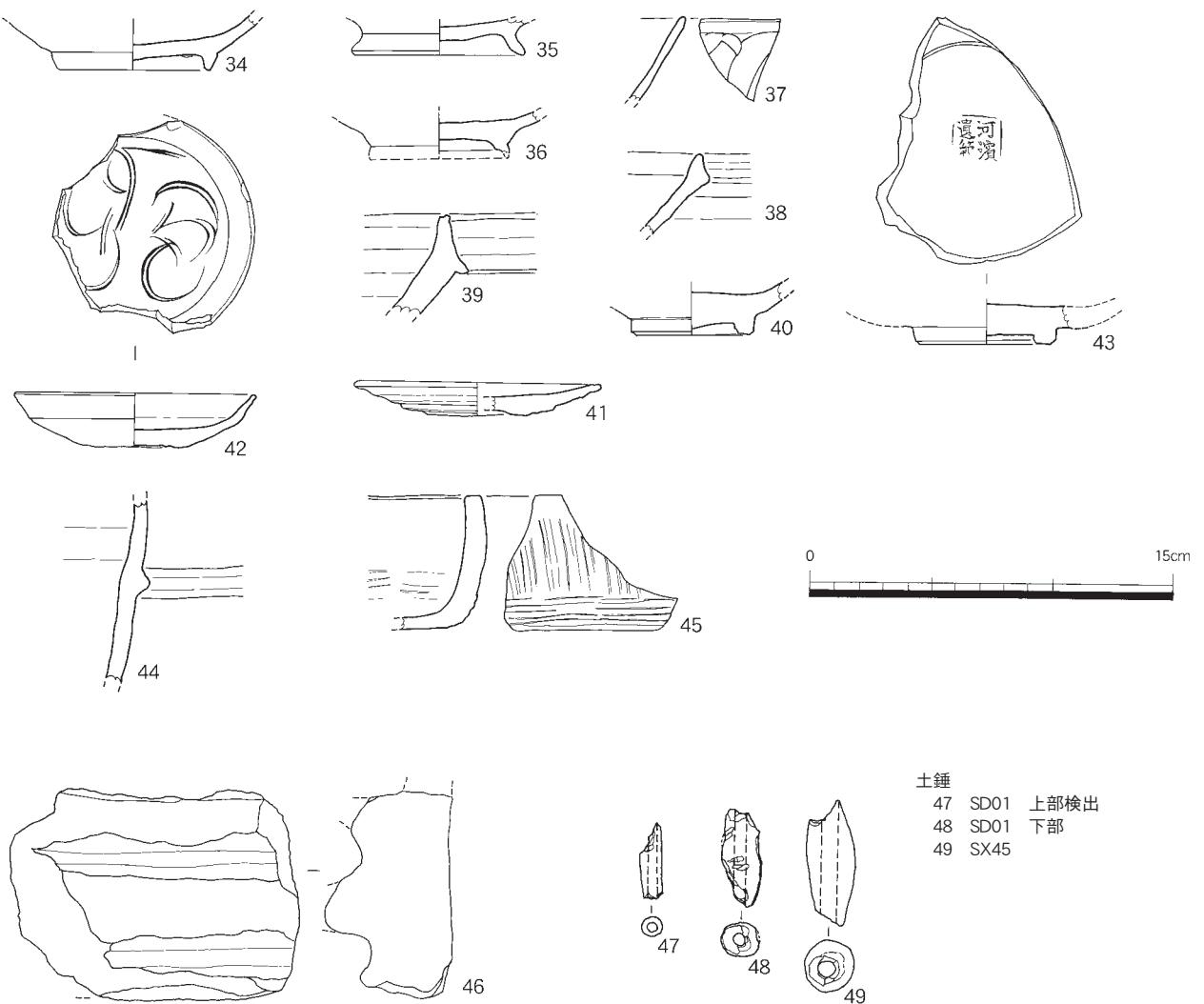


Fig. 15 その他遺構出土遺物実測図 (1/3)

着している。

20の真土の厚さは2.1~2.6cmを測り、図示した下部が厚くなる。上面は接合面で、その角度から図示より傾斜する可能性がある。20、21とともに真土部分は硬質である。鋳型面は黒灰色を呈す。

21~23は湾曲から上帶の可能性がある。横断面はわずかに凹面となっている。23はSX57出土であるが、21、22と同じ部位とみられる。21、23は下端に横帯がみられる。鋳型面は灰色を呈した厚さ1mmの上真土が塗布され、剥落した面からも挽き型の痕跡がみられる。真土は厚さ1.3cm前後で、外面に褐色を呈した脆い粗土が付くが、スサはほとんど含まない。

土壤内出土遺物

24は土師器椀である。高台は厚く、ほぼ直線的に伸び、端部は丸く收める。大宰府編年のX期前后とみられる。25は斜格子タタキ、26は格子タタキの丸瓦玉縁である。

溶解炉（甑炉）

26は口縁部の可能性がある。スサを含む粗い粘土に内面は6mm、外面にはきわめて薄く砂粒を含む粘土を被覆する。わずかに外反し、端部は丸く仕上げる。外面は強い指ナデの痕が並列する。厚みは6.0cm。27、28も26の近くであろう。29は復元した胴部最大径46.2cmを測る。内面下部は器壁が発

泡し、赤褐色の流動滓が付着する。また熱変化により下部の器体が変形し、めくり上がっている。積み上げた粘土帶は5.8~10.0cmを測り上部にかけて長くなる。30は内面に流動滓が厚く付着することから体部下位と考えられる。硬化し発泡している器面の外側には粗い粘土が残る。31は下底近くとみられる。赤褐色を呈し硬化、発泡した器面の外側には2層の粗い粘土がみられる。32は羽口が剥離した部分である。羽口径は10.2cm前後に復元できる。33は変形が著しい体部下位である。器体が反対方向に湾曲している。

その他の遺構と遺物

SE31

調査区北端で検出された。上部は攪乱を受けている。半分が調査区外となり、完掘ができなかった。掘方は西側に広がった2段の形状のため掘りなおされた可能性がある。深さは検出面から126cmの標高1.2mまで掘り下げ、径60cmを測る桶の井筒を検出した。

出土遺物（37、38）37は蓮弁文の青磁碗、38は東播系の須恵質鉢である。遺構の時期は13世紀代であろう。

SE37

調査区中央部で検出された。掘方は径2.8~3.2mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さ150cm（標高0.92m）で径60cmの桶1段分の井筒を検出した。出土遺物の35は土師器碗、36は緑釉陶器碗である。しかし、SE37の時期は桶を井筒に使用していることからもSE31に近い時期とみられ、図示した遺物より新期であろう。

SK81

調査区南西部で検出された。幅55cm、長さ115cmの隅丸長方形プランを呈す。上部は黄褐色砂土が南側に寄って浅く層厚5cm程度で堆積し、近世のSX68を切る。下層には焼土塊を多く含む褐色粘土が堆積する。埋土中には鋳型片46の他、近世の遺物を含む。46は幅1.8cmの横（縦）帯が2.0cmの間隔をおいて平行する。図示した右側面、下面、及び裏面は端部の器面をなす。上面は段状となり、半分が破面となっている。器面は明黄褐色を呈し、砂粒を少し含む粘土で覆われ、裏面にスサの痕跡を残す。内部は脆く、砂粒を多く含む暗灰色土からなる。

SD38

調査区北西部で検出された。幅80cm、深さ25cmを測る。現在の町並みに沿った方向に延長するとみられる。出土遺物44はSD38から出土した瓦質の茶釜である。

遺構面等出土遺物

34は2面検出時に出土した越州窯系青磁碗である。高台内側の外底に粘土の目跡を有す。39、40、41は1面検出時に出土。39の備前摺鉢は15世紀代であろう40は青磁碗、41は土師器蓋である。外面は回転ヘラ切りの痕跡をとどめ、中心は凹む、口縁端部には細い沈線が巡る。42は攪乱から出土した龍泉窯系青磁皿である。I-2b類に近いが2本歯の単純な花文である。外底に目跡が付く。43は柱穴SP63から出土した龍泉窯系青磁皿（浅形碗）である。内底に「河濱遺範」の印文を有す。45は南東部の土壙SX59上面から出土した土師質の鍋である。

IV おわりに

最後に調査の中心となった梵鐘鑄造遺構について項目的にまとめておきたい。

1. 梵鐘の供給先

位置や時期から管崎宮もしくは神宮寺と考えられる。現在までのところ、その境内が不明なため具体的な位置関係を示すことはできない。しかし、箱崎宮北東部の39次から72次周辺、南側の30次か

ら47次調査にかけては大宰府分類の10～11世紀代の瓦当を含む瓦が出土しているので現在よりその範域はかなり広かったことが想定される。出土土器もこの分布に重なり10世紀代に遡るもののが含まれる。

2. 製作時期

遺物からは鋳造土壙内から出土した土師器碗23と小割りにされた瓦片151個体、鋳型の文様などから判断することになる。23は底部と高台のみの遺存のため詳細は不明であるが、X期頃（10世紀後半～11世紀前半）と思われる。瓦片も概ねこの時期であろう。鋳型の文様から具体的な時期を示すことは困難であるが、下記の特徴が挙げられる。

先ず、龍頭の口が波打ち横方向に伸展することが目に付く。在銘鐘では大峯山寺（大和 天川村）天慶七年（944）と金峯山寺＝廃世尊寺（大和 吉野町）永暦元年（1160）との間でこの傾向が異なる。頭部、耳、鬚については徳照寺（摂津 神戸市）長寛二年（1164）に近いが、火焔宝珠の大きさや複雑性から本梵鐘は時期が遡るであろう。撞座については西本願寺（山城 京都市）永万元年前後（1165）に近いが、本例は内区との境を鋸歯文で画すことから古相を呈す。従って、鋳型の文様からは空白の10世紀中頃から12世紀前半までの間を言うに留まる。

3. 梵鐘の規模

梵鐘の規模を推定するものとして、検出されたジョウの規模と10の笠形の径が挙げられる。ジョウは正円形ではなく、崩れて隅丸方形に近い形状であったが、軸長の110cmから梵鐘口径も概ねこの数値に近いものと思われる。また10の笠形と上帶の境を巡る横帯の径は誤差が大きいと思われるが43cmを測る。そこから上帶の下端にかけて広がるものと考えられる。高さについては根拠を示すものは無いが、比率から龍頭を除く鐘身は140cm前後と思われる。

4. 鋳造方法

（1）鋳型の固定方法

湯入れ時の鋳型の固定方法として掛木によるものと埋めて固定する方法が知られている。今回の調査では土壙中埋土はすべて鋳造後の鋳型等が崩れたもので充填されていた。従って、鋳造中は空間を有した掛木による固定と考えられる。ただし、北辺に沿って埋まっていた炭を含む砂丘砂については起因するところが不明である。

（2）ジョウ（底型）について

五十川氏は調査事例からジョウ（底型）と内型・外型の組み合わせを分類している。（五十川伸矢『東アジア梵鐘生産史の研究』2016 p-44）。本調査では上層の焼土層とジョウの灰白色粘土との層界が明瞭であったが、巡る内型・外型や、ジョウ（底型）上面に残る色変の違いも検出できなかったことから既述のように鋳型面は破壊され、下部のみが遺存していると判断した。

5. 生産について

本調査では攪乱による破壊が著しかったが、検出された鋳造遺構はSK42のみである。従って継続した生産では無く、鋳物師の出吹きによるものと考えられる。IIで既述したように筥崎宮と大宰府は密接な関係を有していることから大宰府の管制により派遣されたであろう。

箱崎遺跡の中心をなす筥崎宮の創建時から11世紀頃の様相はほとんど明らかにされていない。10世紀代に遡る可能性がある瓦当や土器類が今回の調査地点より南側において多く見られる。おそらく、筥崎宮や神宮寺の境内では性格上、遺構、遺物の量や密度は少ないと思われる。従って、単純に集落の展開、盛衰の中に含まれると見失いかねない。今回の梵鐘鋳造遺構の検出により、今後、筥崎宮、神宮寺の境内を想定した視点が必要と考える。



Ph. 1. 梵鐘鑄造土壙SK42検出状況（南から）



Ph. 2. SK42北側部分の土層（北から）



Ph. 3. SK42第2層赤色焼土層検出（東から）



Ph. 4. SK42第2層焼土層剥ぎ取り途中（西から）



Ph. 5. SK42ジョウ（底型）下部検出（西から）



Ph. 6. SK42ジョウ周囲炭層検出（北東から）



Ph. 7 SK42ジョウ（底型）下部全体（北東から）



Ph. 8 SK42ジョウ（底型）下部断面と掛け痕（西から）



Ph. 9 SK42北辺土層（東から）



Ph. 10 SK42東側下部落ち込み土層（南から）



Ph. 11 溶解炉29



Ph. 12 溶解炉28



Ph. 13 溶解炉31



Ph. 14 溶解炉32



Ph. 16 溶解炉33

Ph. 15 溶解炉30



Ph. 17 龍頭鑄型 1



Ph. 20 龍頭鑄型 5、6

Ph. 19 龍頭鑄型 4

Ph. 18 龍頭鑄型 2



Ph. 21 撞座鑄型 8



Ph. 22 撞座鑄型 7



Ph. 23 笠形鑄型10



Ph. 24 橫帶鑄型14



Ph. 25 橫帶鑄型12



Ph. 26 橫帶鑄型16



Ph. 27 橫帶鑄型13



Ph. 28 鑄型23



Ph. 29 鑄型21



Ph. 31 鑄型19



Ph. 32 鑄型接合面 9



Ph. 30 鑄型21縦方向の断面



Ph. 33 鑄型18

報告書抄録

ふりがな	はこざき53							
書名	箱崎53							
副書名	箱崎遺跡第71次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1343集							
編著者名	荒牧宏行							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2018年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかけんふくおかしひがし 福岡県福岡市東区 はこざき 箱崎1丁目2584番1、 2584番5	市町村	遺跡番号			20140619 ～ 20140808	160	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
箱崎遺跡第70次	町屋	古代～中世	梵鐘鑄造遺構 井戸、 溝、掘立柱建物、土壙、	梵鐘鋳型、陶磁器、 土師器	梵鐘鑄造遺構			
要約	<p>筥崎宮の北東部に位置する。筥崎宮から北へ延びた砂丘列の頂部付近に位置する。攪乱によって大半が破壊消滅しているが、残っている地山の明黄褐色砂の標高は4.0m前後である。</p> <p>残存した遺構には10～11世紀代と考えられる梵鐘鑄造遺構が含まれる。鋳型土台の下部や掛け木の跡が残り、鋳型や溶解炉等が出土した。筥崎宮の近くから検出され、筥崎宮神宮寺との関連からも極めて重要である。他には中世から近世までの井戸（13世紀）、柱穴、土壙が検出された。</p>							

箱崎53

－箱崎遺跡第71次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1343集

2018年(平成30年)3月26日 発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 陽文社印刷株式会社

福岡市南区大楠2丁目4-10